もし神のお導きでわたしの書いたものを讀んで下さる方があるとすれば、わたしがどういふ譯でゴリューヒノ村の史話を綴るに至つたかを知られることも、恐らくその方々にとつての一興であらう。そのためわたしは、豫め若干の委曲を盡して置かなければならない。

わたしは文學者といふ身分に、常々一ばん羨望を感じて來た男である。わたしの兩親は尊敬すべき人物ではあつたが、舊弊な教育を受けた純朴な人だけに、讀書といふことは一切したことがなく、家ぢゆうを探しても暦の本と『最新書簡文範』と、それにわたしの買つて貰つた初等讀本とのほかには、さつぱり本といふものがなかつた。この書簡文範に讀み耽るのが、長年にわたつてのわたしの大好きな日課であつた。わたしはすつかり空で覺えてはゐたものの、それでも毎日讀み返すたびに、今まで氣のつかなかつた新らしい美しさを發見したものである。わたしは人の顔さへ見ればこの人物のことを問ひ訊すのだつたが、遺憾千萬にも誰一人としてわたしの好奇心を滿足して呉れる人はなく、誰一人として彼を親しく知つてゐる人もなかつた。いくら訊いて見ても得られる答は、クルガーノフ[1]は、『最新書簡文範』を著はした人だといふだけで、そのくら

ゐのことなら訊くまでもなくちやんと承知してゐたのである。杳として捉へがたない闇が、まるで太古の半神の身を包むやうに、彼の身邊を包んでゐるので、わたしはときどき、果して實在の人物かどうかを疑ひさへしたものである。彼の名が作り事のやうに思はれ、彼に關する傳說は第二のニーブール(註)の考證に俟つべき荒唐無稽な神話のやうな氣がした。とはいへ彼のことが絶えず念頭にこびりついて離れないので、わたしはこの神祕な人物に何かしら顏をつけて見ようと苦心した。そして到頭しまひに、郡會議員のコリューチキンに似た人に相違ないと決めてしまつた。これは赤い鼻とぎよろぎよろした眼をもつた、小つぽけな老人であつた。

一八一二年になるとわたしはモスクヴァへ出されて、カルル・イヴァーノヴィチ・マイエルの塾に入れられたが、そこには三月足らずしかゐなかつた。敵軍の入城前に、塾が閉ぢられてしまつたからである。塾生活の收穫としては打球戯と稱する遊戯が頗る上手になつただけで、わたしは鄕里へ歸つて來た。そして間もなくこの遊戯を、召使の倅どもに一人のこらず教へ込んだ。ナポレオン軍が叩き出されたのち、兩親はふたたびわたしをモスクヴァへ出さうと考へた。カルル・イヴァーノヴィチが元の燒跡に戻つて來てゐればそれでよし、さもなければ何處か他の學校へ入れるつもりだつたのである。しかしわたしは、どこの塾でも起床時間は大抵七時ときめてあるが、自分の健康はとてもそれに堪へられなかつたので、やはり村に置いて呉れるやうに母親を拜

み倒してしまつた。といふ次第で、わたしは依然もとの教育程度のまま、塾にゐた間にわたしが通曉することのできた唯一の學問である打球戯をやりながら、十六の年を迎へたのである。

その年わたしは＊＊＊歩兵聯隊に士官候補生として入隊して、引き續き昨一八＊＊まで勤めてゐた。この軍隊生活がわたしにのこした愉快な記憶は極めて乏しいけれど、ただ士官に昇進した時と、それから嚢中わづかに一ルーブリ六十コペイカといふ淋しさの折も折、まんまと骨牌で二百四十ルーブリをせしめた時の愉快さとは、未だに忘れられない。やがて殆んど時を同じうして最愛の兩親に死に別かれたわたしは、軍隊を退いて世襲領地へ歸らなければならなかつた。

わたしの生涯に於けるこの時代は、自分にとつて非常に大切なものだから、次に縷々として述べるつもりである。但しこれが親愛なる讀者諸賢の愛顧に甘え過ぎる嫌ひがあるやうなら、その點はあらかじめ御宥恕を願つて置く。

秋の鬱陶しい日のことである。ゴリューヒノ村へ出る道の岐れてゐる宿驛に着くと、わたしは自前の馭者を傭つて、村道を走らせた。一體わたしは生れつき穩やかなたちではあるが、自分の一番樂しい時代を過ごした土地を、一刻も早く再び目にしたい思ひにじりじりしてゐたので、酒

手を氣ばるぞと喜ばせたり、殴りつけるぞと威かしたり、のべつ暴なしに馭者を急き立てたものである。おまけに馭者の背中を小突きまはす方が、財布を引つぱり出したりその紐を解いたりするのより樂なものだから、實は三べんほどやしつけたものである。尤もこんなことは生れてこの方ないことだつた。一體わたしは、どうした譯だか知らないが、馭者連中といふものが特別に好きなのである。

馭者はさかんに三頭立て（トロイカ）を驅り立てる。がどうもわたしには、奴が例の馭者根性を出して、なるほど掛聲や鞭の振り方は景氣がいいが、その實手綱の方を引きしめてゐるやうな氣がしてならない。やがての果てにゴリューヒノの林が見えはじめ、それから十分後には車は地主屋敷へ乘り入れた。わたしの胸は烈しく打つてゐた。わたしは異樣な心の波立ちを覺えながら、あたりを見まはした。八年間といふもの私はゴリューヒノを見なかつたのである。まだわたしのゐるうちに垣根のほとりに植ゑつけられた白樺の若木が、今ではもう大きくなつて、見上げるばかりの鬱蒼たる大樹になつてゐる。門内の廣場は、曾てはきちんと形のととのつた三つの花壇で飾られ、その間を廣い砂道が走つてゐたものだが、今では蓬々とした草地に變り果てて、茶色の牝牛が一匹草を食んでゐる。

わたしの馬車は表玄關に横づけになつた。從僕が降りて行つて扉をあけにかかつたが、よく見

ると釘づけになつてゐた。とはいへ鎧扉は開けてあるし、家の中には人の住む氣配がしてゐる。やがて百姓女がひとり召使小舍から出て來て、わたしの用向きを訊ねたが、それが旦那のお歸りと分かるとあわてて小舍へ取つて返し、間もなく召使たちが總出でわたしを取り圍んでしまつた。馴染のある顏、馴染のない顏を見るにつけ、また一同と打ち融けた接吻を交はすにつけ、わたしは胸の底からこみ上げてくる感動をおぼえた。わたしのいい遊び相手だつた小悴たちは、今ではもう立派な百姓になつてゐるし、その昔使ひ走りの役をして床（ゆか）べたに坐つてゐた小娘たちも、今では百姓女房になり濟ましてゐる。男連中は嬉し泣きに泣いてゐる。わたしが女房連に『ひどく老けたなあ』と無遠慮な口を叩いてやると、向ふはしんみりした調子で、『ふんとに旦那も、えらい器量が落ちましたよ』と答へる。やがてわたしが裏口へ案内されると、昔の乳母が迎へに出てきて、わたしに抱きつきざま大聲に泣きだした。まるで艱難の旅からオデュッセーアが歸つて來たやうな騒ぎだ。風呂を立てに驅けだす者がある。今では仕事がないので伸び放題に鬚を伸ばした料理番が、夕食をこしらへませうと名乘り出る。尤ももうそろそろ黄昏れてゐたから、夜食かも知れない。乳母と亡くなつたわたしの母の小間使とがおもやひで使つてゐた部屋が、早速わたしのために掃除される。といふ譯で間もなくわたしは、父親の質素な住家に歸つてゐる自分を見いだし、二十三年の昔にわたしが産聲をあげたその部屋で、ぐつすり寢入つてしまつた。

三週間ほどはあれやこれやの用事に追はれて、席の暖まる暇もなく過ぎた。つまり郡會議員や貴族團長や、色々樣々の縣の役人連を相手に、暮らしたわけである。やがての果てにわたしは相續權を得て、世襲領土を所有する身になつた。まづほつと一安心はしたものの、間もなくわたしは、無爲から來る倦怠に惱まされはじめた。わたしはまだ、善良且つ尊敬すべき隣の地主＊＊＊とは、近づきになつてゐなかつたのである。經營事務に至つては、わたしは全く無緣の衆生だつた。わたしは例の乳母を女中頭兼支配人の役目に昇進させてやつたが、彼女のして聞かせる話は、屋敷內で起つた總計十五種類の逸話から成り立つてゐて、これはわたしにとつて頗る興味津津たるものがあつた。が惜しむらくは彼女の話振りは切つて嵌めたやうにいつも同じだつたので、間もなくわたしにとつて第二の『最新書簡文範』になつてしまひ、どの頁にはどんな行があるかまで、すつかり覺え込んでしまつた。ところであの偉勳赫々たる本物の『書簡文範』の方はどうかといふと、わたしはそれを藏のがらくたの山の中から見づけだしたが、二目と見られぬみじめな有樣になつてゐた。わたしはこの本を明るみに出してやつて、さて讀みにかからうとしたものの、さすがのクルガーノフも往年の魅力を失つてゐた。とにかく一度だけは讀み返したけれど、それつきりもう開けても見なかつた。

かうした窮境に立ち至つたとき、ふと頭に浮んだのが、ひとつ自分で何か書いて見たらといふ

考へだつた。親愛なる讀者のすでに御承知の通り、わたしの受けた敎育といへば頗る中途半端なもので、その後も一度逃がした機會を自力で取り戻す折もなく過ぎた人間である。つまり十六の年までは召使の小伜どもと騷ぎ廻つてゐたし、それからのちは縣から縣へ、宿舍から宿舍へ轉々として、ユダヤ人だの酒保商人だのを相手にしたり、おんぼろの撞球臺で球をついたり、ぬかるみの中を行軍したりで、時を潰して來たのである。

かてて加へて作家になるといふことは、到底一筋縄では行かぬことに思はれ、とてもわれわれ俗人の手の及ぶところに非ずといふ氣がしてゐたので、ペンをとるといふ考へがはじめて浮かんだ時には、思はずぞつとしてしまつた。第一、どうかして作家といはれる人達の一人にめぐり逢つて見たいといふ燃えるやうな念願を抱きながら、それがついぞ一度として叶つたこともないこのわたしが、いまに作家の仲間入りができるなどといふ大それた希望を一體もてるものだらうか？　さう言へば、ちやうど思ひ出した事があるから、それを次に物語つて、わたしが常々祖國の文學に對して抱いてゐた熱情の證しとすることにしよう。

一八二〇年のこと、まだ候補生だつたわたしは、公用でペテルブルグへ行つたことがあつた。そこで一週間滯在したが、知合ひなどは一人もない土地であるに拘らず、頗る愉快な時をすごした。毎日こつそりと劇場の四階席へ通つて、役者といふ役者の名をおぼえてしまひ、なかんづく

ある日曜興行に悲劇『人間嫌ひと後悔』のアマーリヤの役を實に見事に演じた＊＊＊には、ぞつこん惚れ込んでしまつたものである。朝は朝で、參謀本部の歸りにはあんまり上等でない喫茶店へ寄つて、チョコレート一杯で文藝雜誌を讀み漁るのを常とした。さてある日のこと、『善意』[3]誌の評論を讀み耽つてゐると、誰やら羊羹色の外套を着た男が傍へやつて來て、わたしの本の下敷になつてゐたハンブルグ新聞を一枚そつと引き出した。わたしは夢中で讀んでゐたので、眼もあげなかつた。見知らぬ男はビフテキを注文して、わたしのすぐ鼻先に席を占めたが、相變らず讀み耽つてゐたわたしは氣にも留めなかつた。そのうちに彼は朝食を濟ませ、ボーイの怠慢振りを叱り飛ばし、麥酒を半本明けるとそのまま出て行つた。すぐ傍で若い男が二人朝食をとつてゐたが、その一人が相手に向かつて、

「おい、あの人が誰だか知つてるかい？」と言つた、「あれは作家のBだぜ。」

「作家だつて！」とわたしは思はず大聲をあげると、矢庭に讀みかけの雜誌も飲みさしのチョコレートも抛り出して勘定臺へ駈けつけ、釣錢も貰はずに表へ飛び出した。ぐるりと見廻すと、遙か彼方に例の羊羹色が見えたので、わたしは殆んど駈け出さんばかりの勢ひでネフスキイ通りを突進した。ところが幾歩も歩かぬうちに、不意にわたしを引き留める者がある。振り返つてみるとそれは一人の近衛士官で、歩道に於いて上官を突きのけるといふ法があるか、即刻立ちどまつて不動の姿勢をとらにやならん、と叱られた。この小言を食つてからは大いに氣をつけることにしたけれど、運の悪い時には悪いもので、引つきりなしに士官がやつて來る。のべつにわたしが立ちどまつてゐるうちに、作家はずんずん前方へ遠ざかつて行く。生まれてこの方、わたしはこの時ほど兵隊外套を重荷に感じたことはないし、生まれてこの方この時ほど、肩章が羨ましかつたこともない。が到頭しまひにアニーチキン橋の袂で、わたしはその羊羹色に追ひついた。

「ちよつとお尋ねしますが」とわたしは擧手の禮をしながら言つた、「B氏ではいらつしやいませんか？ 實は『文化の競爭者』[4]で結構な論文を拜見した者ですが。」

「飛んでもないこつてす」と彼は答へた、「わたしは作家ぢやありません、代言人ですよ。だがBならよく知つてゐます。十五分ほど前にも、ポリツェイスキイ橋の袂で逢ひましたつけ。」

といふ次第で、わたしのロシヤ文學に對する尊敬の念は、私に釣錢三十コペイカを棒に振らせ職務上の譴責を喰はせ、すんでのことに營倉行きといふ放れ業を演じさせたきりで、結局何の得るところもなかつた。

理性の聲はしきりに異議を唱へたけれど、作家にならうといふ大それた考へは引つきりなしにわたしの頭に浮かんだ。とどのつまり、もはや本然の誘ひに抗ふ力も失せて、わたしは一冊の厚い帳面を用意すると、何はともあれそれを埋めて見ることだと、決心の臍を固めた。次にわたし

は、詩といふもののあらゆる種類（といふのは、地味な散文といふもののことはまだ考へても見なかつたからで――）を、檢討し評價した擧句に、國史に取材した叙事詩をやることに斷然きめた。主人公捜しには大して手間どらず、リューリク[5]を選び出して、さて仕事にとりかかつた。

韻文といふものには、些か身に覺えがあつた。といふのは隊の將校連の手から手へ廻覽されてゐた、『モスクヴァ廣小路（ブールヴァル）の批評』とか、『プレースネンスキイ池畔の批評』とか、『危險なる隣人』[6]とかいつた類ひの小冊子を、寫し取つたことがあるからである。とはいへわたしの詩はなかなかはかが行かず、たうとう三句目で投げ出してしまつた。敍事詩は自分の肌に合はないと思つたので、今度は悲劇『リューリク』を書きはじめたが、悲劇も一向にはかどらない。そこで譚詩（バラード）風に變へて見ようとしたけれど、どうしたものか譚詩も巧く行かなかつた。やがて遂に靈感がわたしを訪れた。そこで筆をとつて首尾よく書きあげたのが、『リューリクの肖像に題す』といふ詩であつた。

この題詩は、特に弱冠の詩人の處女作として見るとき、まんざら棄てたものでもなかつたけれど、やつぱり自分は詩人に生まれついてゐないのだといふ感じを免かれなかつたので、この最初の試作で詩の方は諦めることにした。が度重なる創作上の苦勞のお蔭で、わたしはすつかり文學の仕事に愛着ができてしまひ、もはや手帳とインキ壺を手離す譯には行かなかつた。そこで身を

落して散文を手がけることにしたのである。まづ手はじめには、題材を調べたり構想を立てたり部分々々を繼ぎ合はせたりする手數は省くことにして、何の脈絡も何の順序もなしに、心に浮かぶがままの斷想をそのまま書きとめようと思ひ立つた。ところが悲しいかな、その想（ネタ）が一向に浮かんで呉れず、まる二日がかりで僅かに次のやうな警句をでつち上げたものである。

『理性の法則に邊はずして、本能の誘ひに從ふ慣ひある者は、道に迷ひ易く、且つ後に及んで悔むことあり。』

この意見は勿論當たつてはゐるが、決して新らしいとは言へない。そこで斷想の方はやめにして、今度は物語にとりかかつたけれど、何分不馴れなため、假空の出來事を組み立てる力がない。でわたしは、曾て色んな人から聞いた素晴らしい逸話を選んで、その眞相を生彩ある話術で裝ふのはもとより、時には己れの空想の花で飾ることを力めた。さうした物語を幾つか編んで行くうちに、次第に自分の文體ができて來、正しく氣持よく流暢に表現する術を會得して行つた。けれど間もなく種が盡きてしまつたので、わたしは又もや、自分の文學活動の對象を探すことになつた。

嘘か本當かも疑はしい些末な逸話などは棄てて、眞實の偉大な事件を物語つて見たいといふ考へは、前々からわたしの想像をひどく唆つてゐたものである。時代や民族の審判者、觀察者、ま

た豫言者になることは、わたしの眼には作家の到達しうる最高の段階のやうに思はれた。しかしわたしのみじめ極まる教育程度で、一體どんな歴史が書けるだらうか？　博學で良心的な諸大家が先鞭をつけてゐない場所が、果たしてあるだらうか？　まだ彼等の手で掘り盡くされてゐない歴史の種目があるだらうか。世界史を書いて見ようか？　だが既にミロー僧正[7]の不朽の勞作があるではないか。國史をやることにしようか？　だがタチーシチェフ[8]、ボルチン[9]、ゴリコフ[10]が輩出したあとで何の語ることがあらう。だいいち教會スラヴ文字も覺え込めないこのわたしに、年代記をつついたり、蟲喰ひだらけの言葉の玄妙な意味を探るなどといふことが、どうして出來ようか？　わたしはもつと小規模の歴史のことを考へて見た。例へばここの縣市の歴史といつた類だが、それにせよ、わたしの手にはとても負へぬ障碍が、何と山ほどあるのである！　まづ縣市へ出掛ける、知事や僧正のお目通りに出る、縣廳の文書庫や僧院の文藏へ出入の認可を願ひ出る、等々といつたあんばいである。一段下がつてわれわれの郡市の歴史となると、ずつと樂には違ひないけれど、これは哲學者にとつても實際家にとつても面白いものではないし、おまけに美辭麗句を揮ふ餘地が極めて乏しいのである。この＊＊＊といふ町は一七＊＊年に市制が布かれたのだが、その年代記に殘つてゐる注目すべき事件は唯一つ、十年前に怖ろしい大火があつて市場や役所を燒き拂つた、といふこと位なものである。

とそのとき、思ひもかけぬ僥倖がわたしの當惑を解決してくれた。屋根部屋で洗濯物を吊るしてゐた農婦が、木屑や塵芥や書物のぎつしり詰まつた古い葛籠（つづら）を見つけ出したのである。わたしの讀書好きなことは屋敷ぢゆうに知らない者はなかつた。ちやうどわたしが帳面に向かつて鷲ペンを噛み噛み、村人のための說教の案をしきりに練つてゐた時である。例の女中頭が『本ですよ！　本ですよ！』と喜びの聲を上げながら、意氣揚々とその葛籠をわたしの部屋へ引つ張り込んで來たのだつた。『なに、本だと！』とわたしは夢中で叫び返して、葛籠へ駈け寄つた。見れば成程、綠や靑の紙表紙のついた本が山ほどある。間もなくそれが古い暦の蒐集だと分ると、わたしの熱狂は冷めてしまつたけれど、とにかくこの意外な掘出し物は嬉しかつた。何といつても本なのである。そこでわたしは洗濯女の勞に酬いるため、大枚五十コペイカ銀貨を奮發した。

獨りになると、わたしは手に入れた暦の檢分にとりかかつたが、間もなくわたしの注意は烈しくそれに牽きつけられてしまつた。一七四四年から一七九九年まで、すなはち丁度五十年間に亘つて、一年も缺けずに揃つてゐるのである。普通の暦に大抵挿し込んであるあの靑紙には、古めかしい手蹟で何やら一杯書き込んである。その文字を飛び讀みして見ると、驚いたことには、書いてあるのは天氣だの家政上の收支だのばかりではなく、手短かながらゴリューヒノ村の歴史についても記してあるではないか。時を移さずわたしはこの貴重な記錄を調べにかかつたが、間も

なくそれがわたしの世襲領地の全歴史で、しかも殆んど一世紀にわたつて極めて嚴密に年代順を追つてゐることが判明した。そればかりではなく、その含んでゐる經濟的、統計的、氣象學的、その他色々な學術的觀察に至つては、ほとんど無盡藏ともいふべきものがあつた。この日以來、わたしはこの記錄の研究にひたすら沒頭することになつた。なぜならわたしは、調和のとれた興趣の深い、しかも教訓になる物語を、この記錄から汲みとることが出來ると睨んだからである。この貴重な文獻に存分親しんだわたしは、さらにゴリューヒノ村についての新らしい史料を漁りはじめたが、程なくその豐富なことに呆れ返つてしまつた。といふ次第で、下調べにまる六箇月を捧げたのち、遂にわたしは宿願の勞作に取りかかり、神の御助けによつて一八二七年十一月三日といふ今日、やうやく脱稿することができたのである。いまわたしは、名前は思ひ出せないがさるわたしと同樣の歴史家が曾てした如くに、己れの至難の大業を畢へるに當つて、しづかにペンを擱き、さて哀傷をいだいてわが家の庭へ立ち出で、己れの成し遂げた事業について瞑想に耽けることにしよう。わたしもゴリューヒノ村史を書き終へた今になつては、もはやこの世にとつて用のない人間であり、己れの義務を果たして心殘りなく、永の眠りにつくべき時だといふやうな氣がするのである！

次にゴリューヒノ村史編纂に當つてわたしの參考とした史料を列擧して置く。

一　わたしの（祖父の）古暦の蒐集五十五部。　最初の二十部は古風な筆蹟で一面に書込みがあり、一々略語符がつけてある。この年代記はわたしの曾祖父に當たるアンドレイ・ステパノーヴィチ・ベールキンの手に成るもので、その著しい特徴は文體が簡明なことである。例へば「五月四日雪。粗暴の廉によりトリーシカを打つ」、「六日、茶色の牝牛斃る。酩酊の廉によりセーンカを打つ」、「八日、晴天」、「九日、雨後雪。天氣の加減でトリーシカを打つ」、「十日、酩酊の廉によりトリーシカを打つ」……といつた風で、思辨といものは一切抜きである。また「十一日、晴天、薄雪積れり。兎を獲ること三匹。」――殘る三十五部は、手蹟が區々だが、大部分は所謂「お店者（たなもの）」流の筆蹟であり、略語符のあるものも無いものもあり、概して冗漫で取りとめがなく、正字法を守つてゐない。ところどころ女の手蹟も認められる。この部分を成すものは、わたしの祖父イヴァン・アンドレーヴィチ・ベールキンおよびその妻女、すなはちわたしにとつては祖母に當るエヴプラクシヤ・アレクセーヴナの手になる記錄である。用人ゴルボヴィツキイの覺書も混つてゐる。

二　ゴリューヒノ村役僧の年代記。　この興味ある稿本は、この筆者の娘を娶つてゐる村の坊さんの家で、わたしが發見したものである。最初の二三枚は引きちぎられて、坊さんの子供達が

所謂紙凧に使つてしまつた。その一つが偶然わたしの屋敷の中に落つこちたので、わたしはそれを拾ひあげて、子供に返してやらうとした途端に、何か書き込みで一杯なのに氣づいた。その最初の二三行を讀むが早いか、わたしは紙凧が年代記で作つたものであることを見てとつて、幸ひにして殘る部分を救ひ出すことができたのである。そして一石あまりの燕麥と引換へに手に入れたこの年代記は、極めて鋭い洞察力と饒舌とを特徴としてゐる。

三　口碑。　わたしは耳にしえた限りの消息は一つとして無視しなかつた。が、就中名主アヴェイの母親アグラフェーナ・トリフォーノヴァに負ふ所が多い。噂によるとこの女性は用人ゴルボヴィツキイの情婦だつたといふ。

四　戸籍簿、　及び農夫の行狀や資産狀態に關する歷代の名主の註記（會計簿及び出金帳）。

神話時代

名主トリフォン

ゴリューヒノ村の創設年代及びその最初の住民は、杳として闇にとざされてゐる。怪しげな言

ひ傳へによると、その昔ゴリューヒノは豐かで廣大な村だつたといふ。その住民は悉く裕福で、人頭稅は年に一回とり立て、數臺の荷馬車に積んで送り出したといふが、何者に宛てて送つたかは不明である。當時は何によらず安く買ひとり、高く賣る慣はしであつた。用人といふ役は置かれてなく、名主は何人の怨みをも買はなかつた。住民は大して働かず鼻唄まじりの氣樂ぐらしで、牛飼ひは長靴をはいて牛の見張りをしたものださうである。しかしわれわれは、右のやうな魅惑的な光景に、たぶらかされることは禁物である。蓋し黃金時代に關する考へは凡ゆる民族を通じて似たり寄つたりで、たかだか人間といふものが決して現在に滿足するものではなく、しかも經驗によつて未來に大した希望をかけるでもなく、返らぬ昔を己れの空想の花々でひたすら裝ふものであることを、證明するにすぎないのである。確實なのは次の諸事實である。すなはちゴリューヒノ村は大昔から、名高いベールキン家の持村であつた。しかしわたしの祖先は多くの世襲領地を持つてゐたため、この邊鄙な土地を顧みなかつた。したがつてゴリューヒノは僅かな年貢を納め、村團の寄合ひと俗に稱せられる村會の席上で住民が選擧した、世話役たちによつて支配されてゐたのである。

ところが月日のたつにつれて、ベールキン家の父祖傳來の領地は分割され、次第に衰微して行つた。富裕な祖父の血をひく孫達は、落ちぶれながらも贅澤の習慣が拔けず、今では既に十分の

一に縮まつてゐる領地から、昔どほりのたつぷりした上がり高を要求した。そこで怖ろしい命令が相ついで下ることになつた。名主がそれを村會で讀み上げる、世話役達が長廣舌を振ふ、村會が上を下への大騒動になる――といつた譯で、二倍の年貢をあてにしてゐた地主の旦那は、案に相違して手垢だらけの紙に認めて銅貨で封印をした、長つたらしい申譯や、卑下つた哀訴の手紙を、受けとることになつたのである。

暗雲がゴリューヒノ村の上に低迷してゐるのだが、誰一人そんなことは考へても見なかつた。住民の選擧した最後の名主はトリフォンであつたが、この男の治世の最後の年のこと、ちやうど寺の祭禮の日で、がやがやと遊興場（俗に居酒屋と稱する）を取り卷いたり、『藥鑛頭のアルヒープ』の唄を大聲でうたひながら、手に手を組んで往來を練り廻つたり、村人總出の大歡樂の折も折、編細工の幌を深くおろした旅行馬車が、息もたえだえの二頭の痩馬に曳かれて村へ乘り込んで來た。馭者臺には襤褸をきたユダヤ人が坐り、馬車の中からは緣無し帽子をかぶつた頭がのぞいて、大浮かれの村の衆をさも物珍らしげに打眺める樣子だつた。村人達は馬鹿笑ひと粗野な嘲罵とを以て馬車を迎へた。（備考。ゴリューヒノ村役僧の年代記に曰く、「衣服の緣をばくるりと筒形に卷きなして、これら無分別どもはかのユダヤ人馭者を愚弄仕り、『猶太人、猶太人、豚の耳でも啖らへ！……』と囃し立て申候」云々。）

ところが、その馬車が村の中央まで來てとまり、馬車の主が跳び下りざま權柄高な聲で、名主トリフォンをこれへ呼べと命じたときの、一同の驚きはどうであつたらうか！　奉行殿はちやうど遊興場で愉快の最中だつたが、やがて二人の世話役が恭しくその兩脇を抱きかかへて連れ出して來た。見知らぬ男はぎろりと相手を睨みつけると、一通の書面を渡して、即刻讀んで見ろと命じた。名主は明き盲だつた。一體ゴリューヒノの名主は代々、決して自分では何も讀まぬのが通例だつたのである。そこで書記のアヴヂェイを呼びにやる。ぢきそばの横町の垣根の下で醉ひつぶれてゐるのを見つけて、例の男の前へ引つ張つて來る。だが不意を食らつて仰天したのか、それとも何か厭な蟲の知らせがしたのか、崩さずには書いてある手紙の文字がまるで霧を隔てて眺めるやう、とても讀むどころの騒ぎではなかつた。見知らぬ男は、名主のトリフォンと書記のアヴヂェイに烈しい呪ひの言葉を浴びせて、さつさと行つて寢ろと大喝し、手紙を讀むのは明日に延ばして、自分は村役場を指して歩いて行つた。そのあとから、例のユダヤ人が主人の小さな鞄をさげてついて行つた。

ゴリューヒノの村人達は、この前代未聞の出來事を、驚きのあまり物も言へずに眺めてゐた。が間もなく、馬車のこともユダヤ人のことも見知らぬ男のことも忘れられた。その日の殘りは相變らずのがやがや騒ぎと陽氣さのうちに暮れ、そしてゴリューヒノ村は明日のさだめも知らずに、

ぐつすり寢入つてしまつた。……

朝日がさし昇るとともに、けたたましく窓を打つ音と、村會へ出ろと觸れる人聲に、村民の眠りは破られた。村人たちは陸續として、村會の廣場に充てられた役場の構内へやつて來た。どれもこれも濁つた赤い眼をして、顏はむくんでゐる。欠伸をしたりそこらをぼりぼり搔きながら彼等は、緣無し帽をかぶり空色の古長衣(カフタン)をつけて、役場の玄關に仁王立ちになつてゐる男をぼんやりと眺め、どうやら見たやうな顏つきだがと、しきりに思ひ出さうとしてゐる。名主と書記のアヴチェイがすぐその傍に帽子をとつて居並び、ひどく悲しさうな卑屈な樣子をしてゐる。

「これでみんなか?」と見知らぬ男が訊いた。

「みんな集まつたか?」と名主が繰り返した。

「みんなだよお」と村民達が答へた。

そこで名主は、旦那樣から御觸狀を頂いた旨を披露し、書記に命じて皆に聞こえるやうに讀み上げさせた。アヴチェイは進み出て、次の文言を讀みあげたのである。(備考。この秋霜烈日の如き御觸狀は、わたしが名主トリフォンの家で筆寫したものである。この興味ある手紙をわたしが自分のところで探し出せなかつた譯は、トリフォンがそれを、曾てゴリューヒノ村を統治してゐた時代の他の記念品と一緒に、聖像龕に納めて保存してゐたからである。)

トリフォン・イヴァーノフ!

本狀の持參人は余の代理人＊＊＊にして、余が世襲領ゴリューヒノ村の支配人に就任する目的を以て、同村に赴くものなり。その到着するや直ちに村民を召集し、領主たる余が意志を一同に布告せよ。すなはち、余が代理人＊＊＊の彼等村民に對する命令は、余自身の命と心得て之を遵守すべく、彼が要求するところのものは悉く絕對に之を履行すべきなり。もし然らざる時は、彼＊＊＊は如何なる嚴罰を以て彼等に臨むも苦しからざるものとす。余をして茲に至らしめたる所以のものは、彼等が破廉恥なる逆心、及び汝トリフォン・イヴァーノフが情を彼等に通じて怠慢を事とせるに依る。

署名　　某

すると＊＊＊はX(ヘール)字形に脚をふんばり、字(フェルト)形に手を腰に當てて、次のやうな短かい、感銘の強い演說を試みた。

「よく氣をつけてこつちを見る、あまり利口ぶらんが宜しい。——お前等が增長しきつてをることは、ちやんと分つてをる。だがわしはお前等の頭からその馬鹿な考へを叩き出して見せる

ぞ、昨日の醉ひもさめぬうちにな。」

誰の頭にももう醉ひなどは殘つてゐなかつた。ゴリューヒノの村人達は、まるで雷に打たれたみたいに悄然として、ぶるぶる顫へながらめいめい吾が家へ散つて行つた。

用人＊＊＊の治世

さて＊＊＊は政權を掌握すると、早速農民達に財産目錄の提出方を求め、彼等を富農と貧農とに二分して己れの政綱の實施に着手した。因みにこの政綱は特に注目に値するものがある。

その根本原理をなすものは、次のやうな公理であつた。それは、百姓は金廻りがよければよいほど增長するし、貧乏なほど大人しい、といふことである。これに基いて＊＊＊は、溫順といふことを農民の美德の第一と看做して、世襲領地にこの美風を培ふことに努力した。すなはち、

第一。從來の滯納額は富農の全部に割當て、ありとあらゆる强硬手段に訴へて之を取り立てる。

第二。窮乏しながら且つ遊惰を事とする者は、直ちに野良へ驅り出して耕作に從はせる。その結果、もし用人に於いてその働きを不十分と認めた場合には、その者は他の農夫の作男たらしめ、それに對して抱へ主より、自發的に年貢を用人に納入する。また農奴の境涯に落とされた者は、自由を買ひ戻す權利を有するが、但しその際には滯納額に加ふるに人頭稅年額の二倍を支拂ふことを要する。

といふ譯で、一切の社會的負擔は富裕な農夫の肩にかかつたのである。徵兵制度[12]に至つては、この貪婪な用人をして凱歌を擧げさせたものである。なぜなら、徵募が碌でなしや破產者に及ぶのは一番後廻しで、それまでは徵兵のあるたび每に、富裕な農夫が順番に身代金を拂つて兵役に就いたからである。村會は解散されてしまつた。年貢徵收に當つて用人は、一年ぢゆう絕え間なしにちびりちびりと取り立てる方法をとつた。農夫達にしてみれば、以前に比べて年貢がひどくかさんだとも思へなかつたが、そのくせいくら頑張つても、儲けることも、たんまりと蓄めることも出來ないのだつた。かうして三年のうちに、ゴリューヒノ村は貧乏のどん底に陷つてしまつた。なほその上に、用人は色んな名目で苛酷な稅を設けるのだつた。ゴリューヒノ村はもはや昔日の面影もなく、市場はさびれ果て、藥罐頭のアルヒープの唄も聞かれなくなつた。自分の田を作る農民は半數に過ぎず、殘る半分は作男の境涯に落ちてしまひ、子供達は物乞ひをして歩くやうになつた。そして寺の祭禮はどうかといふと、年代記作者の表現を借りれば、欣喜抃舞の日に非ずして、追悼の涙新たなる哀しい年忌になつてしまつたのである。

ゴリューヒノ年代記の一節に曰く

ここに極悪非道の用人は、アントン・チモフェイエフを足枷の刑をもて窮命仕り候へば、チモフェイ老人は身代金百ルーブリを積みて請出し申候。また用人はペトルーシカ・エレメーエフを足枷の刑に處し、その父親は六十八ルーブリを以て請出し申候。極悪非道の用人はまたリョーハ・タラーソフにも足枷の憂目を見せんと仕候ところ、この者は森へ逃亡いたし候により、用人はいたく悲歎に暮れ、何やら怖ろしけなることを喚き立て申候。また醉ひどれ者ヴァンカを町へ引つ立て行き、新兵に差出し申候。

有史時代

本地方はその首都の名に因んでゴリューヒノと呼ばれ、人口實に六十三人、その地球上に占むる地積は二百六十町歩を越えてゐる。北はヂェルヌーホヴォ、ベルクーヴホォ兩村と境を接し

（因みにこの兩村の住民は貧に瘦せ細り、矮小であり、その領主は兎狩りと稱する武技に耽つてゐる）、南はシーフカ川をはさんでカラーチェヴィの自前農民の領地に對してゐる。因みにこれは頗る迷惑な隣人であつて、その性の兇暴殘忍によつて著はれてゐる。西には繁榮せるザハーリヤの沃野が、賢明かつ教育ある地主達の下に泰平を謳歌しつつ、本村を圍繞してゐる。東は荒涼たる無人境および通ふに路なき沼澤に隣接し、そこには鶴越橋（つるこけもも）しか生ひず、蛙の鳴聲が單調な響きを傳へるのみである。且つまた迷信的な言ひ傳へによれば、何やら惡鬼が棲んでゐるといはれる。

備考。この沼澤はその名も惡鬼ガ澤と呼ばれてゐる。言ひ傳へによると、むかし一人の愚鈍な豚飼女がこの荒寥たる沼のほとりで張番をしてゐたところ、間もなく腹に子供ができて、しかも滿足な言譯をどうしてもなし得なかつたといふ。村人はてつきり沼の主の仕業だと噂をしたが、しかしこの說話は苟くも歷史家たるものにとつては一顧の價値もなく、ニーブールが出でて後は信ずることさへ許されぬことなのである。

古來ゴリューヒノは地味の肥沃と、農作に適した風土とを以て鳴つてゐた。その豐穰な田圃には、裸麥、燕麥、大麥、および蕎麥が育つた。白樺の林と樅の森からは、住民が木を伐り出し又

は落枝を拾ひなどして、住家の建築や燃料に用ひた。胡桃、つるこけもも、べにこけもも、みやますのき、にもこと鈌かなかつた。蕈は非常に澤山に採れ、これは濃いクリームで煠めると頗る珍味であるが、但し腹のためにはよくない。池は鮒に滿ち、またシーフカ川には梭魚やひけが棲んでゐる。

ゴリューヒノの住民は、大部分は中背で、がつしりと堂々たる恰幅である。眼は灰色、頭髪は亞麻色または人蔘色である。女子の特徴に數へられるものは、やや上向きの鼻と、秀でた頰骨と、その肥滿ぶりとである。

備考。がつしりした女房。この言葉使ひは戸籍簿面の名主の註記に、屢〻見かけるところである。

男子は性質温和で、且つ勤勉（特に自己の畠に於いて）、また勇猛である。その多くは單身よく熊に立ち向ふ度胸を有し、また拳闘の名手として近隣に名高い。概してみな、飲酒といふ肉體的快樂を愛してゐる。女子は家事にいそしむほかに、また大部分の勞働を男子とともにし、剛毅さにかけても男子にひけをとらない。名主などにぴくぴくする女は極めて稀である。彼女等は威力ある夜警隊を組織して、夜の眠も寢ずに地主屋敷を警固するが、これを女槍兵（この言葉はスロヴェニヤ語[13]の槍といふ文字に由來する）と稱する。この女槍兵の主な任務は、なるべく頻繁に

鐵板を石で打ち鳴らして、悪計を抱くやからに脅威を與へることである。女子はまた頗る美人であると同時に身持ちがよい。厚顔男子が挑みかかる時は、臓にしみるやうな邪慳な返答をする。

ゴリューヒノ村の住民は古くより、菩提樹皮、同上製の籠、及び樹皮靴の商ひを手廣く營んでゐた。この商ひの發展を促したものはシーフカ川であつて、すなはち春には恰も古代スカンヂナヴィヤ人の如くに獨木船で渡河し、そのほかの季節には、前以て股引を膝までまくり上げて淺瀬を渡つたものである。

ゴリューヒノ村の言語は明かにスラヴ語の一派であるが、然しロシヤ語がスラヴ語と異ると同程度に、やはり異つてゐる。すなはち種々の省略および切斷によつて、現在の形をとつたもので、ある種の音に至つてはまつたくその跡を絶つか、或ひは他の音によつて代られてゐる。とはいへロシヤ人は容易にゴリューヒノ人の言葉を解しうるし、その逆もまた眞である。

男子は通常十三歳にして、二十歳の處女と結婚する。したがつて妻は四五年のあひだは夫を打つが、それからのちは夫の方でもそろそろ妻を毆りはじめる。かやうな次第で兩性ともに各々その權力時代を有し、よつて以て平衡が保たれた次第である。

葬禮は次のやうにして執行された。息を引きとるとその日のうちに死人は墓地へ運ばれる。死人を家の中に置くことは場所塞ぎになるだけだからである。尤もそのため、棺に納めて村外れへ

擔いで行く間一髪のときに當つて、死人が嚏(くさめ)や欠伸をして、親戚一同に筆舌に盡しがたい喜びを與へるといふやうなことも、再三起つたものである。妻は夫の死を嘆き哀しんで、「いとしい背子よ、雄々しい君よ、誰に見かへてこの妾(わたし)を捨てなすつたか？　何を貴郎の思ひ出草にすればよいのぢや？」と且つ怨じ且つ哭くを常とした。墓場から歸つて來ると、故人追善のため酒宴がひらかれ、親戚や友人は二三日にわたつて飲みつづける。時には一週間に及ぶこともあるが、これは故人を偲ぶ眞情と愛着の深さに比例するものである。この昔ながらの儀式は今なほ保存されてゐる。

ゴリューヒノ村の住民の衣服は、股引の上にルバーシカを着けるもので、これは明かに彼等がスラヴ族の出であることを示してゐる。冬になると羊の皮衣を着るが、これは實際の必要上よりも寧ろ見榮のためである。何故さうかといへば、彼等はふだん皮衣を片方の肩に引つかけてゐるだけで、何かちよつと身體を動かさなければならぬ仕事があると、すぐ脱ぎ棄てたからである。

學問、技藝、および詩は、古來ゴリューヒノではかなり榮えて來た。司祭や寺男達のほかにも、この村には讀み書きの出來る人間がきつとゐたものである。年代記は一七六七年頃に住んでゐたテレンチヤといふ書記のことを語つてゐるが、彼は右手ばかりでなく左手でも書くことが出來た由である。この珍らしい男は、請願書でござれ、身分證明書でござれ、その他手紙なら何によらず書いて呉れるので、近隣に名高かつた。この技能のため、また世話好きなため、そして色んな珍事件に首をつつこんだため、彼は一再ならず苦勞をしたものである。彼が死んだのはよほど高齢になつてからだつたが、その頃はもう、兩手の筆蹟はあんまり知れ渡つてしまつてゐたので、今度は右足で書く稽古をしてゐたといふ。この男は（讀者が後段で見られるごとく）、ゴリューヒノ村史に重要な役割を演じてゐる。

音樂は教育あるゴリューヒノ村民の常に愛好した技藝であつた。バラライカや風笛は、人の情感を樂しませながら、現在に至るまで彼等の住家にひびいてゐるが、特に往昔は、若い樅(クリスマスツリー)の木と雙頭の鷲の紋章に飾られた公會堂に於いて、その響きが盛んであつた。

詩も往昔のゴリューヒノに於いて頗る榮えたものである。藥罐頭のアルヒープなる者の手に成る歌詞は、後裔たちの記憶に今なほ殘つてゐる。元來これらの歌謠の大部分は、詩人兵士や大貴族の從僕達の手になるロシヤ歌謠を借りたものであるが、ゴリューヒノ村の習俗や種々の事情に當て嵌るやうに、すこぶる巧みに作り替へられてゐる。一例として次の諷刺詩を掲げておかう。

アキム名主がひよこひよこと
地主屋敷にまかり出る。

やをら算木(14)をとりだして、
おそれながらと差しいだす。
旦那はつくづく算木を眺めて
何やら一向合點がまゐらぬ。
や　れさて憎(につく)い名主のアキムめ！
身どもが身代ちよろまかいたな、
持村はすつかり坊主にしをつて
おのれが女房に注(つ)ぎ込みをつたな。

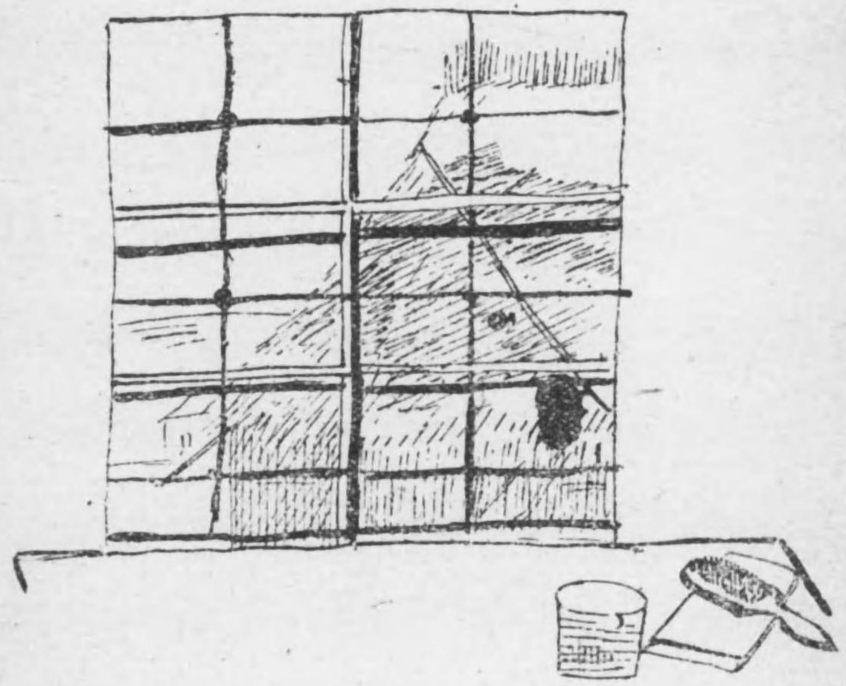
總じてこれらの歌謡は、優婉さにおいて有名なヴェルギリウス(15)の短詩集(エクローグ)にゆづらず、想像の美しさにおいては遙かにスマローコフ氏(16)の牧歌の上にある。尤も様式(スタイル)の乙に氣どつた點ではわが國最近の詩人諸氏に劣るとはいへ、その想の奇拔さと頓智にかけては優に比肩するに足る。

ゴリューヒノ村の政體は數回にわたつて變遷があつた。最初は村團(ミール)の選擧した世話役の支配下にあり、ついで地主の任命した用人の支配に入り、そして最後には直接地主みづからの支配に歸したといふ風に、次第に政權が移つたのである。これら種々の政體の得失如何といふ問題は、以下わたしの物語の進むにつれて展開せられるであらう。

さて以上でゴリューヒノ村の人種誌的及び統計的狀態と、その住民の風俗習慣をひと先づ讀者に紹介しをへた私は、いよいよ次に本筋にはいることにしよう。……

譯

註



ドゥブローフスキイ

(1) 一七六二年――同年露暦六月二十八日ピョートル三世はその妃エカテリーナの使嗾によつて蜂起した近衛隊のため退位を餘儀なくせられ、幽閉後數日にして急死した。妃は帝位を襲つてエカテリーナ二世を稱した。

(2) ダシコーフ公爵夫人――エカテリーナ二世に重用された有名な人物。特に學術の進歩に寄與するところが多かつた。

(3) クーリネフ將軍――ヤーコフ（一七六三―一八一二）。瑞典との交戰に戰功を建てたロシヤの將軍。

(4) ラドクリフ――アンナ（一七六四―一八二三）。イギリスの女流小說家。その幽暗神祕な小說は殆んど全部が露譯されて、當時愛讀されてゐた。

(5) リナルド――リナルド・リナルヂニはロシヤの傳說的な强盜の首魁、多くの盜賊小說の主人公になつてゐる。

(6) アンフィトリオン――同名のモリエールの喜劇より出でて、客を集めて大盤振舞ひをすることを好む主人の意に用ひられる。

(7) コンラド――ポーランドの詩人ミツケーヴイチの叙事詩「コンラド・ヴアレンロド」の主人公。その戀人の名はアリフオンサといふ。

(8) 騷ぐなよ、おまへ、母なるみどりの森……――十八世紀の有名な剽盜にヴアンカ・カインといふ男が

ある。のちにモスクヴァの刑事になつたが、剽盜と謀を通じ遂に事露はれてシベリヤに追放された。彼の冒險は民譚の好主題となつてをり、この唄も彼の作と傳へられてゐる。

一

ヌーリン伯

(1) «Allons, courage !»——「さあ、しつかりなさいまし！」

(2) à jour——透かし編みの。

(3) ギゾオ——フランスの歴史家、政治家。穩健なる立憲主義を抱き、「歐羅巴文明史」及び「佛蘭西文明史」（一八二八年）の著がある（一七八七—一八七四）。

(4) ウォルター・スコット——イギリスの詩人、小説家。浪漫的な歴史小説の作が多い（一七七一—一八三二）。

(5) bons-mots——皮肉、警句。

(6) ベランジェー——フランスの詩人。諷刺的な小唄の作者として著名である（一七八〇—一八五七）。

(7) ロシーニやパエール——ロシーニはイタリヤのオペラ作者。「セヴイラの理髮師」、「オセロ」などの作がある（一七九二—一八六八）。パエールはイタリヤのオペラ作者・ピアニスト。生涯の大部分をフランスで送つた（一七七一—一八三九）。

(8) C'est bien mauvais,……——「いや全くひどい、どだいお話になりませんよ。」

(9) タルマ——フランスの悲劇俳優、第一次帝政時代（一八〇四—一五）をその人氣の絶頂とする（一七六三—一八二六）。

(10) マール孃——フランスの喜劇女優。モリエールの作を得意とした（一七七九—一八四七）。

(11) ポチエ——フランスの喜劇俳優、小さな町小屋に出演してゐた（一七七五—一八三八）。

(12) le grand Potier !——「偉大なるポチェよ！」

(13) d'Arlincourt とラマルチーヌ——ダルランクールはフランスの小説家。封建時代に取材した怪奇小説の作がある（一七八九—一八五六）。ラマルチーヌはフランスの浪漫派詩人。「瞑想詩集」（一八二〇）、「新瞑想詩集」（一八二三）を著した（一七九〇—一八六九）。

(14) ルクレチヤ——羅馬の傳説によれば、ルクレチヤは羅馬王タルクイニウス・スペルブスの一族タルクイニウス・コラチヌスの妻であつたが、同族セクスツス・タルクイニウスのため辱かしめられ、その復讐を遺族に托して自刃を遂げた。彼女の悲劇はやがて羅馬王國の顚覆、ひいては羅馬共和國の建國（西紀前五一〇年）の原因をなすものである。ルクレチヤの名は貞烈な婦人の異名となつてゐる。

キルジャーリ

(1) アレクサンドル・イプシランチ——ギリシヤ獨立運動の結社「ギリシヤ神聖隊」の首領。一八二一年

トルコ軍のため敗北。のち墺太利に客死した（一七八三―一八二八）。

(2) スクリャーヌイ――ベッサラビヤの小都邑。ルーマニヤ國境に近い。

(3) ヤッスイ――ルーマニヤの都會、當時モルダヴィアの首邑であつた。

(4) ネクラーソフ黨――一七〇八年にイグナート・ネクラーソフが創設した民團組織をもつコサックの一派。中のあるものは十九世紀のはじめトルコ騎兵の特種部隊として活躍してゐた。

(5) リョフ――ブルガリアの貨幣單位。一リョフは約三十七コペイカに當る。

ゴリューヒノ村史話

(1) クルガーノフ――ニコライ・ガヴリーロヴィチ（一七二六―九六）。ロシヤの文學者。「書簡文範」、「逸話の泉」等の著がある。

(2) ニーブール――バルトルード・ゲオルグ（一七七六―一八三一）ドイツの歴史家、考證家。歴史上の典據に批評的態度を以て對した最初の人として有名である。

(3) 『善意（ブラゴナメーレヌイ）』誌――A・E・イズマイロフがペテルブルグで發行してゐた雜誌で、一八一八年から一八二六年まで存續した。一八二二年以後は主として田舍の讀者や小官吏層を相手の程度の低い文藝雜誌になつてゐた。因みにこの時代はあたかもロシヤに於ける雜誌文學の開花期に當つてゐる。

(4) 『文化の競爭者』――正しくは「文化と善行の競爭者」。ペテルブルグのロシヤ文學愛好者自由協會の手で一八一八年から一八二五年まで發行されてゐた雜誌の名である。

(5) リューリク――ロシヤ建國の祖、西紀八六二年ノヴゴロドに大公となる。

(6) 『危險なる隣人』――プーシキンの父方の伯父ヴァシーリイ・リヴォーヴイチ・プーシキン（一七六七―一八三〇）はカラムジン派に屬する詩人であつた。

『危險なる隣人』は彼が一八一一年に著した諷刺的叙事詩で、當時寫本として大いに世に行はれてゐる。

(7) ミロー僧正――フランスの僧院長。その著『萬國史』は一八二〇年に露譯されてゐる（一七二六―八五）。

(8) タチーシチェフ――ヴァシーリイ（一六八六―一七五〇）。ロシヤの歴史家。『太古よりのロシヤ史』五卷がある。

(9) ボルチン――イヴァン（一七四五―九二）。ロシヤの歴史家。「ルクレルクのロシヤ古代・近世史への註釋」の著がある。

(10) ゴリコフ――イヴァン（一七三五―一八〇一）。ロシヤの歴史家『ピョートル大帝の事績』全三十卷がある。

(11) 薄雪――降りたての薄雪で、獲物の追跡に絶好のものを指す。

(12) 徴兵制度――當時は兵役の義務は農民及び町人階級のみに課せられてゐた。その服役年限の二十五年は農奴にとつて頗る辛いものであつたが、しかも農奴を服役させるか否かは一に地主の自由に任されてゐたのである。この制度はピョートル一世在世中（一六九九年）より國民皆兵制度が布かれた一八七四年まで引續き存續し頗る農村經濟を疲弊せしめた。

(13) スロヴェニヤ語――南方スラヴ語の一派。

(14) 算木――文官の百姓が貸借の控へに用ひたもの。金高、月日を刻み目でしるす。

(15) ヴェルギリウス――羅馬の詩人(前七〇―一九)。この短詩集はその初期の作である。

(16) スマローコフ氏――アレクサンドル・ペトローヴィチ(一七一八―七七)。ロシヤ最初の職業文學者。劇作家として最も著名であるが、また寓話詩、諷刺詩の作もあり、文藝批評をも試みた。

あとがき

ロシヤの家庭の言ひつたへや、
うつとりするやうな戀の夢や、
昔ながらのお國かたぎを
ただ語り傳へるだけのはなしさ。
――『オネーギン』第三章

詩人アレクサンドル・プーシキンにおける散文作品の意義を、多少とも嚴密に論ずるとすれば、それはあくまで副次的なものと言はなくてはならない。現に詩人みづからも、さう考へてゐたことは、例へば一八二七年の夏、最初の野心的な散文小説『ピョートル大帝の黒奴』(これは未完に終つてゐるが――)を書きはじめた頃の手紙に、「感興がまだ湧かないから、とりあへず散文にとりかかつた」(友人デリヴィグ宛)と記してゐるところなどから、たやすく察しのつくことであらう。彼はあくまで韻律をはなれては、七絃琴を手にとらずには、ものを考へることのできない純粋な詩人であつたし、また、さうあるべき人であつた。このことは、何度くり返してもくり返しすぎることのない、きびしい眞理であつた。

にもかかはらず、プーシキンのうちに散文への關心が目ざめたのは、かなり初期のことにぞくする。韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』の第三章が書かれたのは、早く一八二四年のことであるが、すでにその中で彼は、やがて自分が「詩人を廢業して、新らしい惡魔が自分のなかに巣をかけることになるかも知れん」と言ひ、さらに、「アポロの威し文句なんぞ尻目にかけて、地味な散文に身を落とすかも知れん」と歌つてゐる。わたくしがこの『あとがき』の題詞に選んだ四行の詩句は、やがてその後につづいてゐる意味ぶかい自己豫言のことばなのであるが、とも

あれこの詩人が齡わづかに二十五にして、早くも自分の晩年のあり方について、豫感といふには餘りにも的確な、それなりに多分の毒をふくんだ、冷嚴な判斷をくだしてゐたといふ事實は、われわれ百年後の外國人にしても、さまざまの反省や省察を強ひられずにはゐられない事がらである。

しかもプーシキンの場合、決して忘れてならないことは、それが必らずしも「詩人の晩年」、あるひは「アポロの日沒」――への彼獨特の敏感な自覺、いひかへるなら、社會的關心の成長といふ積極面をもふくむところの、詩人の人間的運命への歸向――といふやうな、聰明な諦觀ばかりに裏づけられたものであつたとは、言ひきれないといふことである。これを別の言葉でいへば、詩人プーシキンが散文の世界で演ずべく運命づけられてゐた悲劇の重さは、詩の世界で彼が受けもつた先驅者としての悲劇的運命の凄愴さにくらべて、まさるとも決して劣るものではなかつた――といふことにもなる。これは誇張のことばではない。プーシキンを散文へ驅りたてた原動力をしさいに檢討してみるなら、それが必らずしも人間的運命への警敏な忍從ないし歸服といふことのみで說明しきれず、反面に却つて、燃えるやうな野心、やむにやまれぬ烈しい情熱――によつて支へられてゐたといふ事實を、なんとしても見のがすことはできないのである。

詩人プーシキンはかくして、散文の世界でもまた果敢な開拓者であり、したがつて悲痛な受難者であつた。先人未踏の鑛脈に最初の鍬を入れた大膽きはまる探鑛者であり、同時にその發掘した鑛石の意味についての正しい評價を、當人も知らず同時代人も知らず、これを徒らに百歲後の

新たな時代の判斷にゆだねなければならないといつた、故鄕（すなはち人類）に容れられざる、「永遠の預言者」であつた。この意味から言へば、彼の散文もまた彼の文學的悲劇の、放つべからざる一環をなしてゐると、安んじて斷言することができるに違ひない。それは先驅者プーシキンに豫定され且つ實現された、まぬかるべからざる宿命であつた。

もとより、詩人の仕事なり、彼の生活の本質なりを、その散文作品をとほして彷彿しようなどといふ蟲のいい註文は、よしんば如何なる技術的條件の障礙がよこたはつてゐるにせよ、決して許さるべきことではない。これはあくまで念頭に刻んで忘るべきではないけれど、しかもみぎに述べたやうな事情は、ある程度まで、詩人の散文といふものの意味についての、われわれの反省の資料になるにちがひない。このささやかなアポロジイをたのむことなしには、いま讀者の机上にさしださうとするこの譯文集は、その存在理由を見いだすことが到底できないのである。

＊＊＊

プーシキンの散文における仕事が、結果においてどういふものになつたかについては、おそらく別に獨立した一文を必要とするであらう。その間の消息については、最近上梓されたわたくしの譯文集『プーシキン遺珠』や『プーシキン短篇集』のあとがきにも、多少とも觸れておいたからここには繰り返さない。てみじかに言へばプーシキンの散文小說は、十八世紀の遺物である物物しい理想派小說や、十九世紀初頭を風靡したバイロン風の惡魔派小說にたいする、斷乎たる愛

想づかしであり、絶縁狀だつたわけである。ついでながら一言すれば、ロシヤにおいてバイロンの影響をいち早く受けたのは外ならぬわがプーシキンであつたが、彼がそれから比較的初期の韻文作品をもつて脱却したのに對して、この英國の厭世詩人の精神は却つて詩人レールモントフの散文作品『現代の英雄』を俟つてはじめて、眞の意味でロシヤ的風土への馴化を完成したのであつた。

さて、みぎのやうな發生過程をもつプーシキンの散文の世界は、發展するにつれて、おのづから二つの枝に分れて伸びることになつた。その一つは、純粹にロマネスクな興味を主軸とする明快かつ清新な說話の追求であつて、あの五つの『ベールキン物語』(一八三〇年秋の作)、『スペードの女王』(推定一八三三年秋の作)、および本書に收めた『キルジャーリ』(推定一八三四年秋の作)などは、この系列にぞくする作品である。もう一つの枝は、フォークロア的ないし農村史的な關心から發して、しだいに大きく歷史の世界へ伸びてゆく動きであつて、この系列には、未完作『ピョートル大帝の黑奴』(一八二七年夏)をはじめ、本書に收めた『ゴリューヒノ村史話』(一八三〇年秋)、『ロスラーヴレフ』(一八三一年夏)、本書の主な內容をなす『ドゥブローフスキイ』(一八三二年秋より翌年初)、『大尉の娘』(推定一八三三年夏より三六年夏)、および史傳『プガチョーフ史』(一八三三年春より翌年初)などを、屬せしめることができる。

かう見てくると、プーシキンの散文活動における二つの脈は、年代的にもまつたく平行して、互ひにからみ合ひながら成長していつてゐることが、かなりはつきり分るはずである。これが散

文家プーシキンのいはば生態であつた。それのみならず、その生活はさらに、天職たる抒情詩人のそれ、さらにその延長である敍事詩人のそれとも、たがひに相表裏しつつ同時的な進展をとげてゐるのである。かうしてプーシキンの生活構造は、まさしく複雜であつたと言はなければならない。その生き方はほとんどレオナルド的であつたとさへ言つてよいであらう。

＊＊＊

以下この譯本に收めた四つの作品について、おもにその成立ちを略記することにしたい。その前に一應お斷わりしておかなければならないのは、この書の表題のことである。質量兩面からいつて、本書の主內容をなすものが、卷頭の『ドゥブローフスキイ』と卷尾の『ゴリューヒノ村史話』との二篇であることは、一讀して讀者の看破せられるところであらう。つまり前に述べたプーシキンの散文における二つの系列のうち、後者——すなはち歷史的・社會的な興味に根ざすもの、それも特に農奴制度を地盤とする農村の生活を主題としたものとして、もつとも重要な作品と認められてゐる二つの作品を、主內容として含んでゐる作品集なのである。他の二篇は、いはば單調をやぶるための挿繪的な氣持から添へたものにすぎないけれど、ジャンルは異なるとはいへ『ヌーリン伯』は、明らかに地主文化の辛辣な裏面觀としての意義をも多量にふくむ作品であるし、掌篇『キルジャーリ』にしても、甚だしく他との調和をみだすものではあるまいと考へられる。ここに譯者のひそかに意圖したこの作品集の統一性があつた。『莊園ものがたり』といふ

總題は、そのやうな統一性の表示としては好適であるがこの度は思ふ所あつて試みに『俠盜記』と題してみた。もとより、プーシキンの作中にそんな題をもつ作品があるわけでもない。萬一の誤解をおそれて、これははつきりお斷わりしておきたい。

『ドゥブローフスキイ』は、さきに記した作品表からも明らかなやうに、詩人のむしろ晩年にぞくする長篇小說のこころみの一つであつて、生前には發表されず、一八四一年に至つて遺作集の第十卷にはじめて收められた。この題名は後人が附けた假のもので、草稿は無題のままになつてをり、詩人自身は手紙のなかで、この作品を『オストローフスキイ』と呼んでゐたこともある。とはいへこの遺作集に收められたテクストは、編者の不注意と檢閲當局の干涉とによつて頗る歪められた不完全なものであつた。そののち數次にわたる校訂を經て、一應これが正確な原型へ還元されたのは、執筆當時から殆んど百年近い歲月をけみした一九二三年および一九三〇年の兩次にわたつて、ソ聯のプーシキン學者トマシェーフスキイ氏らの手で刊行された單行本ならびに全集においてであつた。いはゆるプーシキン學なるものが、かくも古く、かくも長く、かくも困難なものであることは、この際ぜひとも銘記されなければならない。それはプーシキンその人の先驅者的運命を、端的に物語つてゐるのである。

この作品の發想は、實際の訴訟事件にもとづいてゐる。それは、『タンボフ縣コズロフ區ノヴォペンスコエ部落所在の近衛軍中佐セミョーン・ペトローヴィチ・クリューコフに屬する領地を、陸軍中尉イヴァン・ヤーコヴレヴィチ・ムラートフが不法領有せる件』といふ長つたらしい

標題のついた事件に關するコズロフ郡裁判所の判決文が、その被告・原告の名をそれぞれドゥブローフスキイなりトロエクーロフなりに變へた形で、殆んどそつくりそのまま小說の第二章に編みこまれてゐることからして、論議の餘地のないところであらう。かく現實の領地爭ひを發端としながら、その後の物語の展開に至つては、もとより作者プーシキンの奔放な空想力の所產であつて、今日の眼からすれば些かメロドラマティクな浪漫趣味の過剩が指摘されうるでもあらうが、にもかかはらずスリルにつぐスリルを淡々たる簡素な筆致をもつて敍してゆく冒險小說としての醍醐味は、まさに典型的な俠盜物語をなしてゐると言ふべく、この面の興味だけでも優に讀者をして卷を蔽ふいとまなからしめるに相違ない。そこには作者が當時私淑してゐたウォルター・スコットの傳奇小說、――いはゆる「ウェイヴァリ・ノヴェルズ」の、いちじるしい影響の痕跡が認められるであらう。まぎれもない出藍のほまれをすら伴つて。……

とはいへ、この作品が今日の人心に訴へるものは、決して右のやうな面に盡きるものではない。この物語の含んでゐる不朽の意義は、却つてそれが、すでに爛熟の極に達した地主貴族文化への、鋭利な批判をひそめてゐる點にかかつてゐるに相違ないのである。なかんづく作中にあらはれる二人の大地主――トロエクーロフとヴェレイスキイの性格が、女帝エカテリーナ二世治下における地主貴族文化の二つの異なれる代表者のタイプの迫眞的な活寫であり、その意味でプーシキンの描いた人物畫廊中の代表作であることは、つとに衆評の一致するところである。これに反して貴族階級の脫落者として、また新時代の氣運の體現者として、存分の活躍を期待せらるべ

き主人公ドゥブローフスキイの性格は、いまだ十分な展開をあたへられず、いはば類型的なロマンティクな俠盗の相貌を脱してゐないところに、この作品の重大な未完成さの存することは、なんとしても否定できないのである。

言ひかへればこの作品は、俠盗物語としては一應の完結を示してゐながら、社會小説としては永遠の未完作なのであつた。當初のプーシキン自身のプランによれば、この物語にはなほその後につづく發展が豫定されてゐた。すなはち彼ののこしたメモには、例へば次のやうな數行が見いだされるのである。——

一　マリヤ・キリーロヴナの生活。ヴェレイスキイ公爵の死。未亡人。英國人。逢曳。賭博者。警察署長。大團圓。

二　花婿。ヴェレイスキイ公爵。結婚。討伐隊。戰鬪。徒黨の解散。モスクヴァ。醫師。孤獨。酒場。密告。嫌疑。警察署長。

これによれば、作中に實現されてゐるのはわづかに第二案の前半にすぎず、その後半と第一案の全部とは、まだまつたく着手されてゐないことが知られる。明らかにプーシキンは、なんらかの事情に迫られて、この作品を中途で放棄したのである。

しかしながらその放棄の眞因を、ただ單に苛酷な檢閲への顧慮のみをもつて説明することは、必らずしも當を得たものではあるまい。そこにはもつと内的な原因——いはばプーシキン自身の興味の變遷、いやもつと的確にいへば詩人の社會的洞察力の深まりや、社會的視野の廣まりがあ

つて、それがこの作品の書きつぎへの強い否定力として働きかけたと見なければならない。事實、慧眼なる讀者がたやすく見拔かれるであらう如く、この作品の地盤をなすところの社會史的背景は、すでにその發端において否應ない或る制限を伴つてゐて、豫想されるこの作品第二部の自由な展開のためには、著るしく窮屈なるをまぬかれない。それを作者自身も痛感して、この作品の筆を「徒黨の解散」のくだりで、自發的にをさめたと見るのが、恐らくもつとも穩當な見方であらうと思はれる。

一八三三年一月、當時まだこの作品の第十九章を執筆中であつたプーシキンは、すでに「國事犯人シヴァンヴィチ」を主人公とする別の物語の構想にとりかかつてゐる事實がある。翌月この章を完結すると殆んど同時に、詩人は更にプガチョーフの亂に關する一件書類の閲覽方を、ときの陸軍大佐に申請してゐる。この二つの事實は、當時すでにプーシキンの脳裡に、『ドゥブローフスキイ』第二部に代るべき、より廣汎な社會史的舞臺にめぐまれた別の長篇小説が、着想されてゐたことを明らかに物語つてゐる。その小説とは、いふまでもなくあの『大尉の娘』であつた。かうして『ドゥブローフスキイ』と『大尉の娘』と、この二つの叛亂小説のあひだの關係は、その外見に反して意外に密接なものがあるのである。

＊＊＊

『ゴリューヒノ村史話』は、一八三〇年の秋、結婚を目前にひかへながら、當時ヨーロッパ全

土に猖獗したコレラの餘波を蒙つて、父親の領地ボルヂノ村に蟄居を餘儀なくされた時期の所產である。

このボルヂノの秋が、詩人にとつていかに穰り豐かな一時期であつたかについては、次のやうな作品表を一瞥するだけで思ひ半ばに過ぎるものがあらう。すなはち九月六日この村に到着してのち、十一月末に離村するまでの僅か三ヶ月たらずの間に、散文作品としては『葬儀屋』(九月九日)を手はじめに、『驛長』(同十四日)、『百姓令孃』(同二十日)、『その一發』(十月十四日)、『吹雪』(同二十日。——以上『ベールキン物語』)、さらにこの『ゴリューヒノ村史話』(十一月一日)があり、あたかもそれらの散文作品を詩の世界へ逆に投影せしめたごとき觀のある韻文作品には、『オネーギン』第八章(九月十八日。但しこの章は後に削除、『オネーギンの旅』の名のもとに今日知られてゐる)、おなじく第九章(すなはち現在の第八章。同二十五日)、『コロムナの小さな家』(十月十日)がある。同じ月の十九日には、『オネーギン』の第十章を燒却した事實があり、更にそれにつづいて、いはゆる韻文小悲劇の四部作をなすところの『吝嗇の騎士』(十月二十三日)、『モーツァルトとサリエーリ』(同二十六日)、『石の客人』(十一月四日)、『疫病さなかの酒もり』(同六日)が成り、なほほかにお伽詩『坊さんと下男ベルダの話』(九月十三日)がある。しかも勿論このほかに短篇抒情詩の作は十篇をかぞへ、うちに『英雄』、『悲歌』、『遙かなる故國の岸べ』などの秀作が含まれてゐることも、忘れてはならないのである。

かうして『ゴリューヒノ村史話』は、この多產豐饒をきはめた秋のさなかに執筆されたのではあつたが、しかもつひに未完のまま放擲されるに至つた作品としてこの秋唯一のものであつたことは、甚だ特徵的といはなくてはならない。けだしこの作品は、見らるるごとく農奴制度の醜惡な現實への假借ない批判を、一應の戯作の假面にかくれながらも眞正面へ押しだした世にも峻烈な諷刺小說であり、彈劾書であるが、ロマンティクな俠盜物語などとは事かはり、いやしくも事ここに至つては、たうてい檢閲當局のきびしい監視の眼をくぐつて發表される望みのないことは、問はずして明らかなことであつたに違ひない。プーシキンがあつさりとこの多望な作品の書きつぎを早く諦めてゐたことは、その翌年の夏短篇小說集『ベールキン物語』を一本にまとめて上梓するにあたつて、その序文たる『刊行者のことば』のためにこの『史話』の書出しの部分を解體利用してゐる事實からしても、容易に推察されるところであらう。實際そこには、當のベールキンの名のみならず、その性格や閲歷などまでが、そつくりそのまま移植されてゐるのである。

『史話』の發想は、おそらく詩人自身が當時蟄居を餘儀なくされてゐたボルヂノ村の直接的觀察にもとづいてゐる。この村は彼の結婚祝ひとして父親が譲つてくれたもので、詩人のボルヂノ行きは實はこの未來の財產の實地檢分のためなのであつたが、行つてみるとこの土地は、案に相違してひどい寒村であつた。その幻滅があり、コレラの厄があり、かてて加へてモスクヴァに殘してきた許嫁の、いはゆる「ベルジーノのマドンナ」的な、夢寢にも忘れぬ美しい面影がある。さう三拍子そろつた生活感情のうへに、ボルヂノの農奴たちの慘憺たる地獄繪のやうな過去現在の生態が、燒けつくやうに印象されなかつたなら、それこそうそである。これがこの辛辣な諷刺

小説の成りたちであつた。のみならず諷刺は、その文體の上にまで刻印されてゐる。譯文では到底その再現を望むべくもないのであるが、この作品の綴られてゐる一種獨特の文體——その甚だ滑稽なものものしい調子は、プーシキンにとつて殆んど不倶戴天の論敵の觀のあつたジャーナリスト、『モスクワ・テレグラフ』誌の主幹ニコライ・ポレヴォイ(1796—1846)の著『ロシヤ國民史』や、あるひは遡つてその先蹤である有名なカラムジーンの『ロシヤ國史』などを貫いてゐる尊大な歴史家的な衒學的敍述法を揶揄した、一種のもぢり文章にほかならない。

『史話』は詩人の横死の直後、『現代人』誌の一八三七年第七號に掲げられたが、それはもちろん滿身創痍の、ほとんど原形をとどめぬかたちにおいてであつた。そして前述の『ドゥブロフスキイ』とほぼ同樣の手順を經て、一九二四年に至つてやうやく現在の形にまで「復舊」されたのである。それにしてもこの『史話』の中絶は、文字どほり千秋の恨事といはなくてはならない。「さて本題に入ることにしよう」と書いて、そこで筆は絶たれてゐるのであるが、その前途にまことに洋々たる一大社會小説の展開を豫見せしめずにはゐない。もしこの作品が挫折することなく完成されたとしたら、おそらく『死せる魂』は爲にその光芒をいちじるしく減殺されることになつたかも知れないのである。

**
*

警拔なパロディストとしてのプーシキンの一面は、『ゴリューヒノ村史話』にもその片鱗をひらめかせてゐるのであるが、この譯書にはば挿繪代りに收めた敍事詩『ヌーリン伯』に至つては、まさにこの詩人のパロディスト的大力量を見るうへでの代表作と言はなくてはならない。

この作品は早く一八二五年、ミハイロフスコエ村の幽閉生活中に成つた。草稿では初め『新タルクィニウス』と題されてゐた。

ミハイロフスコエの幽閉時代といへば、プーシキンがはじめてシェイクスピアの眞髓にふれて、彼に觸發されて史劇『ボリース・ゴドゥノフ』を書きあげた時期であつたが、この『ヌーリン伯』もそれとは違つた寧ろ輕い意味でではあるが、シェイクスピアと因緣淺からぬ作品である。つまりこれは、この英國の萬魂詩人の手になる敍事詩『ルクレチア』(一五九四年刊行)を、プーシキンがふと卽興的にもぢつてみせた才氣煥發たるパロディなのである。

このパロディ的作品の發想について、プーシキンは次のやうに回想してゐる。——

「一八二五年の末、僕は田舍にゐて、『ルクレチア』を讀み返した。これはシェイクスピアのあまり上出來ならぬ史詩だが、例の小さな原因から重大な結果が生じる云々といふ月並なお說教を、僕はまたしても讀まされたわけである。そこで僕はかう考へたものだ——萬一あの時ルクレチアの腦裡に、タルクィニウスの頬ぺたに平手打ちを喰はせるといふ考へが浮んだらどうなるだらう? おそらく流石の彼も出鼻をくじかれて、赤面して引きさがつたに違ひあるまい。ルクレチアは自刄せずに濟んだらうし、ブブリコラ(これはブーシキンの記憶ちがひで、正しくはルクレチアの良人コラティヌス)もいきりたつことはいらず、ブルートゥスは王たちを放逐することなく、世界も世界史も今とはちがつたものに

なつたに違ひない。してみれば、共和國だの執政官だの、カトーだのカエサルだのの出現は、ついこのあひだも僕の隣村でおこつたやうな、痴情沙汰のおかげを蒙つてゐるわけになる。で、歴史もシェイクスピアも一緒くたに一つもぢつてやれといふ氣になつて、僕はこの二重の誘惑に抵抗することができず、ふた朝(十二月十三日と十四日)で、この物語を書きあげた。……」云々。

これ以上この作品の成立について蛇足を加へることは無用であらう。試みに原歌とこの替歌をよみくらべてみれば分ることであるが、プーシキンが或ひは原作の口調にわざと意地わるくついて行つたり、かと思ふと途端にあざやか極まるとんぼ返りを打つて、史實も沙翁も一どきに笑ひとばして見せたりする手際は、鬼才プーシキンの明敏輕快な一面を物語つて餘蘊がないのである。手法的には、バイロンの『ベッポー』あたりの顰みにならつてゐる痕跡が濃く、それは作者みづから認めるところでもあつた。

この戯作の全文が年刊文集『北の花々』の一八二八年版にはじめて發表されるや、作者はたちまち轟々たる惡評の矢表に立たされることになつた。批評家ナヂェジヂンのごときは、悖德汚穢、たうてい健全なる子女の讀誦に堪へぬ作品とまで罵つたのである。この酷評に憤激した詩人は、反駁の一文をひそかに用意したのであつたが、結局發表はされなかつた。それは例へば、「どうやらこのお若い批評家は、清らかさといふことについても文學についてと同樣、あやふやな考へしかお持ち合せがないと見える」といつた調子の、かなり露骨な嘲笑をたたへた文章である。

**
*

『キルジャーリ』は一八三四年秋の作と推定されてゐる。その九月から十月へかけて、プーシキンはまたもやボルヂノに滯在してゐるのを見れば、ひよつとするとその間の作かも知れない。發表は『讀書文庫』誌の同年十二月號であつた。

フランス浪漫畫派の首領ウジェーヌ・ドラクロワは、その一八五三年十月二十八日の日記に、『ドゥブローフスキイ』の讀後感として、「まるでメリメの小說を讀むやうな氣がする」と記してゐる。またメリメの手によつて佛譯され、一八四九年パリの雜誌にのつた『スペードの女王』は、その後かなり長い年月にわたつて、メリメ自身の作品と信じられてゐた。このやうにプーシキンとメリメとは、同時代人として互ひに影響しあつた形跡は一向見當らないにもかかはらず、且つ性格からいつても生活環境からいつても血液からいつても寧ろ對蹠的な面ばかり目につくにもかかはらず、實にふしぎなほどの文學的血緣によつて結びつけられてゐたのである。

簡潔體の極致ともいふべき小篇『キルジャーリ』もまた、そのやうな血緣關係をものがたる有力な例證の一つ、——いやその最も有力な例證であるかも知れない。かてて加へてこの作品では、兩作家に共通してゐる近東趣味(オリヤンタリスム)がいみじくも主役を演じてをり、もはや署名なしには全くその歸屬をさだめがたい域に達してゐる。

この作品の主人公ゲオルギイ・キルジャーリといふのは、實在の精悍きはまる剽盜であつて、

篇中に描かれたのと略ゝ同じ閲歴をもち、一八二三年つひに身柄をトルコの總督（パシヤ）に引渡された人物である。當時あたかも南ロシヤへ左遷の身であり、ベッサラビヤの主邑キシニョフで放縱むざんな青春の日々を送つてゐたプーシキンは、この剽盗の運命にいたく感興をそそられたらしく、おそらく彼の身柄引渡の直後に書きつけられたと考へられる『役人と詩人』といふキルジャーリを主題とした詩の斷片が、今日なほ存してゐるほどである。これをそもそもの原初形態とするこの作品が、永いあひだの形式模索の段階を經て、現在われわれの見る一顆の珠玉として結晶するに至るまでには、實に十年餘の歳月を要したわけである。

かうして『キルジャーリ』一篇は、詩人のベッサラビヤ時代の貴い記念であつた。ついでに言ひ添へれば、篇中にはアレクサンドル・イプシランチやヨルダーキ・オリンビオチらのギリシャ神聖隊の運動が背景として採り入れてあるが、これとキルジャーリとの間には、實際にはなんの關係もない。兩者を結び合はせたのは詩人の空想——といふよりは寧ろ、彼の切なる「鄕愁」であつて、プーシキンは早く一八二一年頃から、このギリシャ獨立運動を主題とする史詩をもくろんで、これまた久しく實現しえずにゐたのである。かくてこの小篇は、久しいあひだ詩人の胸裡をはなれなかつた二つの異なつた宿願を、同時にみたすことになつた。この小篇のもつ妖しいまでの凝縮美は、偶然ではないのである。

＊＊＊

最後に、この譯書の挿繪にもちひたプーシキン自筆の六種のペン畫について、簡單に解說しておきたい。

一　『ヴォルテールの顏と自畫像』（卷頭）——プーシキンにとつてヴォルテールは、そもそもの學習院在學時代から一生涯にわたつて、力づよい精神の支柱であつた。彼はこの「師」の顏と自分の顏とを並べて描いたスケッチを數種のこしてゐるが、これもその一つで、一八三四年に書いた『ロシヤ文學のくだらなさについて』といふ露佛文學比較論の草稿の餘白に見いだされるペン畫である。

二　『絞首された男』（八頁）——プーシキンは十二月黨事件にあやふく連坐の厄に逢はうとした震撼的な記憶からして、屢ゝ絞首刑の圖を草稿の端々に描きとどめてゐる。これもその一つで、一八二八年秋の執筆にかかる史詩『ポルタヴァ』第一歌の斷章の餘白にしるされたペン畫。同種の畫材を扱つたものの中でも特に筆力雄勁な佳作である。

三　『椅子にかけた婦人』（一五〇頁）——一八二九年の執筆にかかる未完の作品に、「コロムナの小さな廣場の一隅に」といふ句を以て始まる未完の散文小說がある。これはその草案の一頁の三分の二を占める大形なペン畫で、筆致から見て明らかに想像畫ではなく、實在の婦人の丹念な肖像であらうと思はれる。とすれば、ちやうどその頃プーシキンの意中の全幅を占めてゐたナター

17633

リヤ・ゴンチャローヴァ、すなはち未來のプーシキン夫人こそ、そのモデルとして想像せらるべき最も有力な候補者でなければならない。

四 『馬上の自畫像』（一八〇頁）――一八二九年の夏、プーシキンはカフカーズ旅行を試みた際、折からトルコ兵と交戰中であつた現地軍と行動を共にして、アルズルム（エルゼルム）に入城したことがある。熱情の詩人はみづから突擊隊の先登に立つて疾驅し、負傷するか敵手に捕はれるか二つに一つの瀬戸際に立到つたことさへあつた。このペン畫は同年秋モスクヴァに歸つたプーシキンが、ウシャーコフ家の金襴簿に描いた己れの勇姿の記憶畫である。

五 『ヴォトカの壜に向へる百姓』（一九四頁）――一八三三年三月に書かれた詩「舅のイヴァンどん、酒を飲むならその前に……」の草稿にみづから描き込んだ挿繪風のペン畫である。

六 『窓』（二二六頁）――プーシキンは自分の住居の模樣をスケッチすることは甚だ稀であつたが、この畫は明らかに南方追放時代にキシニョフで住んでゐた自分の宿舍の一隅を描いたもので、珍重すべき記念品である。フランス語の四行詩《J'ai possédé maîtresse honnête…》の草稿の餘白に、さかさまに描かれたペン畫で、詩の內容には關係のない偶作である。一八二〇年の秋あるひは翌年初の筆であらう。

一九四八年三月鎌倉にて　譯者しるす

俠盜記

世界文學社

昭和二十三年十二月一日印刷
昭和二十三年十二月五日發行

譯者略歷
1.一九〇三・一一・一六東京生、外國語學校卒　3.主著エッセイ「詩と小愛のあひだ」創作集「恢復期」譯書プーシャン「スペードの女王」「大尉の娘」「ペールキン物語」「プーシキン選集」等

定價　百二拾圓

譯者　神西清
發行者　榮野方彦
印刷者　富森茂彰
印刷所　京都市下京區西洞院七條南　內外印刷株式會社
發行所　京都市下京區狹屋町四條下　株式會社　世界文學社
日本出版協會會員番號A二一九〇六七
電話下局⑤六〇〇八・六〇〇九番
振替　京都二五六二二番
配給元　日本出版配給株式會社

292

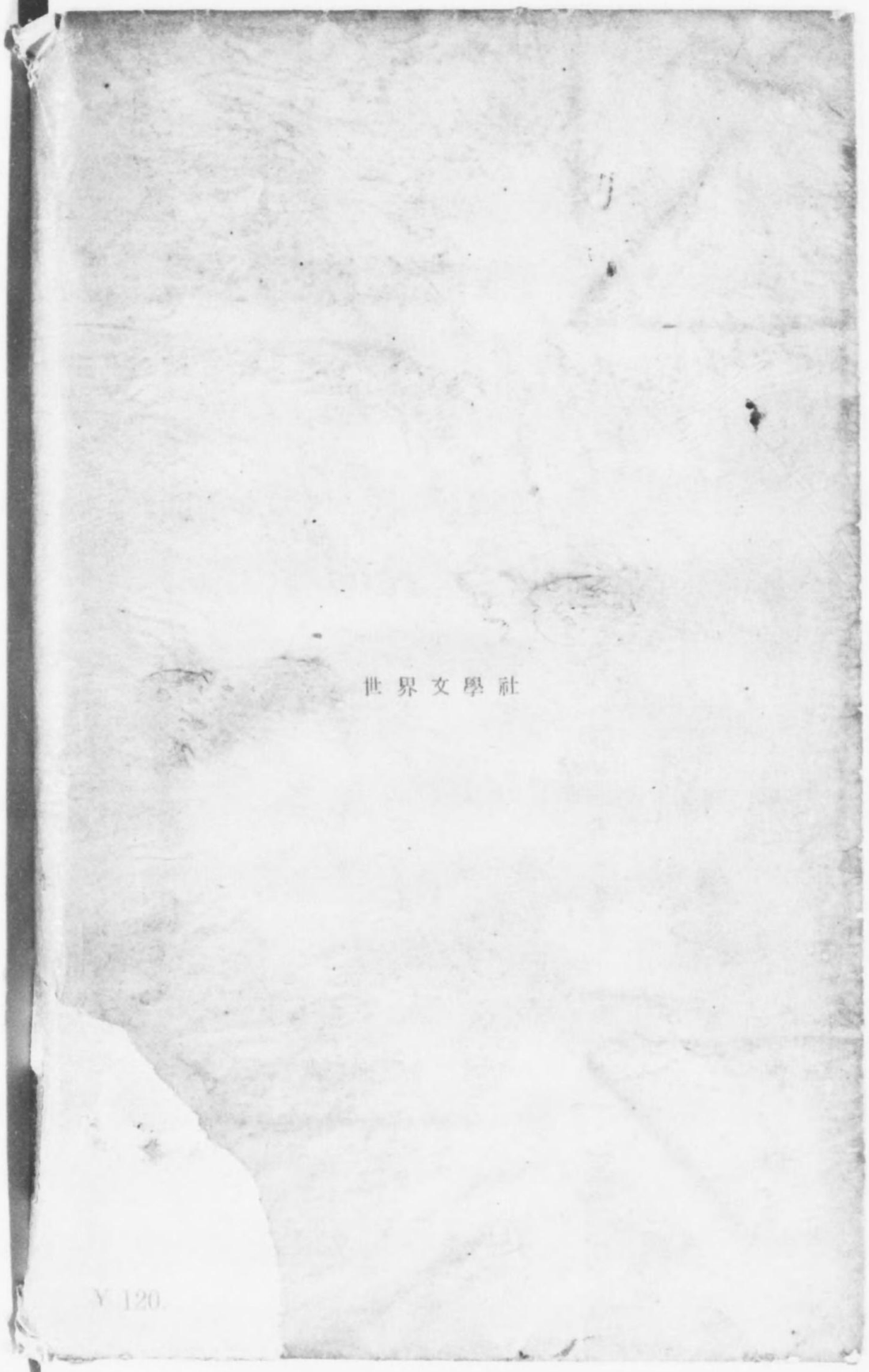
24年 4月 5日

閲九 閲三 閲四 閲三 閲六 閲九 閲八

閲八 閲四 閲四

閲八 閲八 閲八 閲二 閲九

閲八 閲八 閲八 閲八

閲覽濟

終